The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	洋裁文化の形成 ： 服飾デザイナーと洋裁教育
Author(s)	青木, 美保子
Citation	デザイン理論. 2011, 57, p. 116-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

洋裁文化の形成
── 服飾デザイナーと洋裁教育 ──

青木美保子／神戸ファッション造形大学

洋装文化形成期にあった昭和の戦前期から戦後間もない時期，洋服作りにビジネスチャンスを見て取った女性達は，当時まだ珍しかった洋裁学校で洋装のセンスと洋裁技術を身につけ，服作りを生業とした服飾デザイナーとして社会で活動した。こうした女性達の活躍によって，日本女性が容易に洋服を身につけることができるようになったのである。さらにこのような先見性に加え，非凡な行動力を合わせ持った女性達はファッションビジネスとして服作りに関わる一方で，洋裁学校を創設し洋裁の技術を多くの女性達に伝授した。そして，こうした女性達の後に続けと言わんばかりに戦後は，「雨後の竹の子のように……」とその開設の状況が語り継がれるほど，全国各地で次々に洋裁学校が創設された。

一般庶民が洋服を装うためには，洋装店で誂えるか，家庭洋裁という選択肢しかなかった時代，洋裁は，職業に直結する技能になりえ，日常の衣生活にも有益な技術として，魅力的なお稽古事となった。自らのおしゃれを楽しむために，家族が身につける洋服を製作するために，花嫁修業の一環として，あるいは，手に職の信念のもとに，多くの女性達が洋裁学校に通ったのである。こうして洋裁学校ブームは巻き起こり，我が国の洋裁文化が形成された。

日本の洋装に関する研究に関しては，これまで，その普及の実態を明らかにし類型化する試みがなされてきた。しかし，その状況が成立する要因として洋服を入手するまでの過程の実態については，未だ不明な点が多い。昭和の戦前期に芽生え，戦後大きく開花した洋裁という文化に関して，多くの資料と当時を語る生の声がいまだ残る現在にあって，その実態を記録し，研究を進めることは，急務であり，その意義は大きいと考える。

そこで本発表では，このような洋装文化進展の一要因としての洋裁文化形成に焦点をあて，大丸百貨店で服飾デザイナーとして活動する傍らで，大丸ドレスメーカー女学院（現・大丸クリエーターズアカデミーディーズファッション専門学校）の初代校長として洋裁教育にも携わった礒村春の事績に注目することで，当該時期の服飾デザイナーや洋裁学校の果たした役割について考察した。

■礒村春と大丸ドレスメーカー女学院

礒村春は明治41年山口県下松市に生まれ，昭和10年に杉野学園ドレスメーカー女学院師範科を卒業し同校の教員となる。昭和24年，大丸京都店は，大丸ドレスメーカー女学院創設に合わせ，杉野学園ドレスメーカー女学院から，大丸ファッションルームのデザイナー兼大丸ドレスメーカー女学院院長として礒村を招聘した。

開校式には，知事，市長の臨席があり，新入生は約200人であった。教室は昭和25年１月までは大丸６階だったが，その後，校舎が建設され，規模は徐々に拡大していった。クラス編成は，１年目が本科，２年目が師範科の２年制で，本科は，「月・水・金クラス」または「火・木・土クラス」と二つに分けられた。夜学は，開校後１年して開設された。学生数は，昭和30年過ぎのころが最も多く，昼夜あわせて1200人ほどの学生が在籍していた。当時の洋裁学校が小施設でありながら多

くの生徒を抱えこむことができたこのようなクラス編成は，他の洋裁学校の調査でも確認できたことから，当時の洋裁学校では一般的なシステムであったと思われる。

昭和26年，大丸ドレスメーカー女学院は，大丸を創業した下村家の別荘「大丸ヴィラ」でファッションショーを開催している。ステージを造って行われたファッションショーは京都初であった。

礒村のデザイン活動は，同学院主催のファッションショーのほかに，大丸の展示会での作品発表があった。大丸の展示会は春・秋の年２回，大丸大阪店・大丸神戸店・大丸京都店の３店が合同で，大丸大阪店で開催されていた。礒村がデザインしたものを，当初は教員と一部の学生が手伝って製作していたが，学生が多くなると各クラスに割り当てがあった。当時は展示会に教員や生徒が関わっており，このことから，産業界と教育界の境界線が曖昧な様子がわかる。その後，いつ頃からか，同じ大丸ドレスメーカー女学院の建物内に勤務しながら，大丸の社員としてファションルームの仕事だけをする人材が雇用され，はっきりとした棲み分けがされるようになる。

このほか，教員達は，デザイナー達で組織されるいろいろな団体に所属し，それらの団体が主催するファッションショーに自ら制作した作品を出品していた。このような活動を通して，各洋裁学校の教員同士は交流をもち，最新の流行や技術に関する情報交換をしていた。そして，そこで得た新しい情報が，生徒の指導に役立てられていた。

■パリのメゾンとの提携

礒村が大丸京都店でデザイナーを務めていた頃，大丸大阪店では上田安子，大丸神戸店では福冨芳美がデザイナーを務めていた。この３人が活躍中の昭和28年，大丸はクリスチャン・ディオール社と，昭和39年にはジバンシィ社，バレンシアガ社と独占契約を結ぶ。礒村，上田，福冨に東京店の上原愛を加えた４人のデザイナーは，年２回パリで発表されるコレクションの買い付けのために，交代で渡仏していた。ディーズファッション専門学校には，その作品の買い付けに関わる資料が保存されている。その資料から，以下のようなことが明らかとなった。

礒村は，デザイナー活動の傍らで，教育者として，自らがパリの地で目にし，肌で感じ取ったパリモードの情報を，洋裁を学ぶ多くの生徒達に伝えていた。

大丸ドレスメーカー女学院では，大丸がパリから招聘したオートクチュールの技術者から伝えられた縫製技術が，それを直接学んだファッションルームの職員と近しい立場にあった教員を通して，生徒達に伝えられていた。そして，そこから更に推測を深めるならば，大丸ドレスメーカー女学院の教員達が身につけたオートクチュールの技術は，デザイナー団体の情報交換の場での交流を通して，他の洋裁学校の教員達，そしてその生徒達の間に，徐々に広まっていったのではないだろうか。

また，礒村の下で働く大丸ファッションルームの社員達は，デザイナーとして，そのコレクションのデザインを基に，「普及版パリモード」とでも言えるデザインを創作し発信することで，パリモードを普及させていた。

以上，本研究を通して，服飾デザイナーの産業と教育の二つの領域を跨いでの活躍を検証し考察したことで，戦後の日本の急速な洋装普及の一要因を明らかにすると共に，パリモードのセンスの受容やハイレベルの洋裁技術の普及に貢献した洋裁学校の功績の大きさをここに確認することができたといえよう。